

のこと。そして、中国から引揚げてきたのが、二十八年四月、八年振りに帰ってきましたが、就職してなかなかで、転転として今の所に落ちつき、四十七年に主人はガンで死亡しました。

閩船で脱出

高知県 種田繁寿

昭和の初年は非常な不況、貧農の三男に生まれた私は、将来に不安を感じていたさい、さいわいにも同郷の富豪で早くから渡鮮、金南で農場を経営していた大崎さんから、こないかとの誘いを受け、二十歳のとき、昭和四年秋、湖南線松竹里に渡り、働かせてもらっていた。

昭和七年三月初め、前年九月誕生した満州国の東部間島の延吉で商業を営んでいた生家近くの永野という方から、鮮語の判る者が欲しいと招きを受け、私も目的もあったので農場主の了解のもとに退職。同年十月満州へ。翌年八月、当時新渡満者に多発していた満州チフス

にかかり、危うく命を落とす羽目になる。十月末京城府に帰り、翌月警察官を受験。合格。四月一日、光化門警察官講習所に入所、三か月間の講習を受け、金北への出向。道本部で裡里署勤務。十二年十一月帰郷結婚。駐在本署内勤務を経て、同署梨坪面駐在署勤務中終戦となる。

翌朝驚いたことは、日の丸の赤の半分を濃紺で二つ色に塗り、四場に点々をつけた太極旗という旗が家々に林立していたことであった。すでに早くから準備されていたらしい。

私は朝鮮語もできず、また第一線に出た日から朝鮮人の立場からも物事を考え、処してきていたので、平常通りで迫害を受けることは無く、月末迄暮らしたが、署より官舎が一つあいたので引揚げてこいとの電話で、家財を整理し、馬車には荷物と子どもを乗せ、数里の道を徒歩で、夕方になった。終戦の苦難はそこから始まった。

在留邦人家族百六十人ぐらいで引揚げ団体をつくり、密航船で帰ることとし、代表者の交渉で軍部が援助してくれることになり、九月下旬トラック十数台を準備して

くれ、全南へ出て、一路海岸を日ざして南下、夕方オランダ鎮という港町に着き、食糧は大部分軍の支援を受け、学校教室で共同生活。数日後、軍が船を出してくれ、巨文島に渡り、あき家になっていた大きな旅館あとで半月滞在、共同生活。島には四十人の軍人がいた。滞在中の現地人に交渉して、約五十屯級の機帆船二隻をやとい、日和を見ていよいよ故国へ向かい出港。もちろん、軍人一同も共に、途中流されて、福岡沖の大島に着いた。一泊して山口県の仙崎を目ざしたが、途中の角島に着いたが、船が直前座礁して死ぬような目にあい、軍人の機転でようやく港入りして二泊。ようやく本土に渡り、寺の広間を借りて三泊、疲れをいやし、長かった旅と皆に別れを告げそれぞれ故郷へ。

妻の実家へたどり着いたのが十一月四日午後であった。妻の長兄方は開拓団で満州錦西へ、次兄は宣撫官で中国へ。家には、母と姪の二人、心から喜んでくれた。ここからほんとうの引揚げ者の苦労が始まった。

涙のおにぎり

兵庫 鎌田 亦夫

当時主人は、南但の自動車会社に勤務、雄大な大陸へあこがれを持っていました。両親は、一人の男の子に夢を託しており、許しの出るはずがありません。そのとき、知人が、三菱茂山鉱山へ転任されたので、二、三年遊びに行ってくる程度で、両親の許しを得たのです。二歳になる男の子を連れて、清津に着き、支線に乗りかえて、目的地咸鏡北道茂山に到着。冬は零下四十度の極寒。うわさによれば馬賊が出るという。思わずがくせんとしましたが、いったん決心した以上は、茂山鉱山に夢をかけることにし、主人は庶務課に、私は寮の支配人となり、料理人一人、女中四人の朝鮮人とともに朝は四時半起床、朝食をつくり、七時に寮生を送り出し、昼食の弁当買い出し。夕食。夜勤の弁当と十時まででは体の休まるひまもなく、そんな毎日の繰り返し。その後、主人は昇格